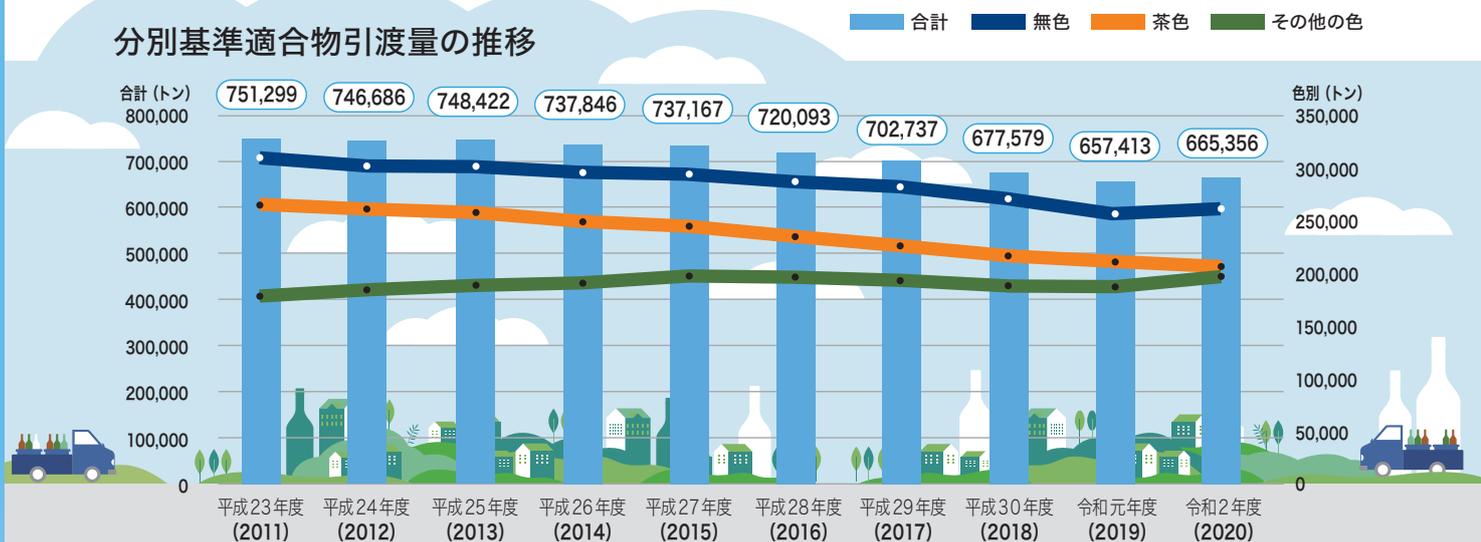


## 減少傾向から反転、7年ぶりに増加。 令和2年度 ガラスびん分別基準適合物引渡数量

環境省公表の「令和2年度 容器包装リサイクル法に基づく市町村の分別収集等の実績」を市町村別に分析するとともに、当協議会が2020年度に実施したガラスびんの収集・運搬方法等の全国自治体アンケート集計結果とのクロス分析を行いました。分析から見えるガラスびんリサイクルの現状と課題を解説します。

当協議会では、令和2年度の自治体別実績を、過去のデータや総務省「住民基本台帳人口」、当協議会が2021年3月に実施した2020年度自治体アンケート結果などを使用して、実態をよりわかりやすく分析したレポートをWebサイトで公表しています

### 分別基準適合物引渡数量の推移



### 「無色」、「その他の色」は増加するも、「茶色」は微減傾向のまま

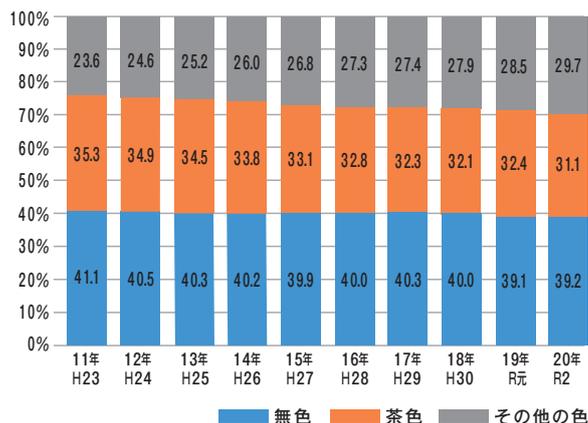
本年3月に環境省が公表した「令和2年度 容器包装リサイクル法に基づく市町村の分別収集等の実績」では、ガラスびんの分別基準適合物引渡数量（以下「引渡数量」）の合計で665,356トンと前年度から7,943トン、1.2%の増加となりました。分析を開始した平成23年度からの引渡数量合計の推移は概ね微減傾向でしたが、令和2年度はわずかながら増加に転じました。同年のガラスびん出荷量が9.0%の減少であったことを考えると、コロナ禍のためのステイホームによる家庭内消費量増加の影響の可能性が高いと思われます。色別では「無色」と「その他の色」も増加に転じましたが、「茶色」は一貫して微減傾向のままです。

### 「その他の色」の構成比は9年連続で増加し、約3割を占めるまでに

色別の構成比は、分析を開始した平成23年度は、「無色」が41.1%、「茶色」が35.3%、「その他の色」

が23.6%でした。令和2年度は「無色」が39.2%、「茶色」が31.1%とともに減少していますが、「その他の色」は一貫して増加し続け、29.7%と10年間で6.1ポイント増加して、11.7ポイントあった「茶色」との差は1.4ポイントまでに肉薄し、全体の約3割を占めるまでになりました。

### 分別基準適合物引渡数量の色別構成比の推移



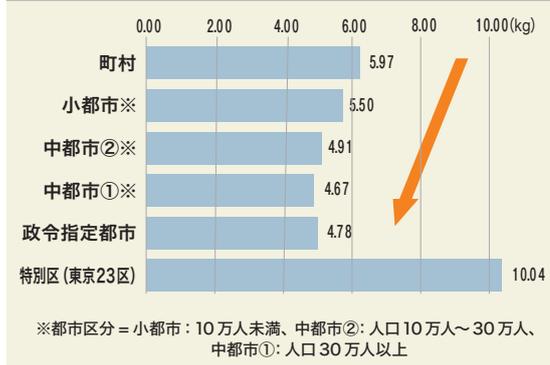
# クロス分析で読み解く、ガラスびんリサイクルの現状と課題

東京23区を除き、規模の大きい自治体ほど1人当たりの引渡量は少ない傾向。都道府県分布では東高西低

令和2年度の1人当たりの引渡量は5.25kg/人と、前年度の5.17kg/人から0.08kg/人、1.5%と5年ぶりの増加となりました。

自治体の人口規模別に1人当たりの引渡量の平均(図1)では、特別区(東京23区)は10.04kg/人と突出して高くなっていますが、これを除くと政令指定都市も含め、規模の大きい自治体ほど1人当たりの引渡量が少ない傾向が継続しています。

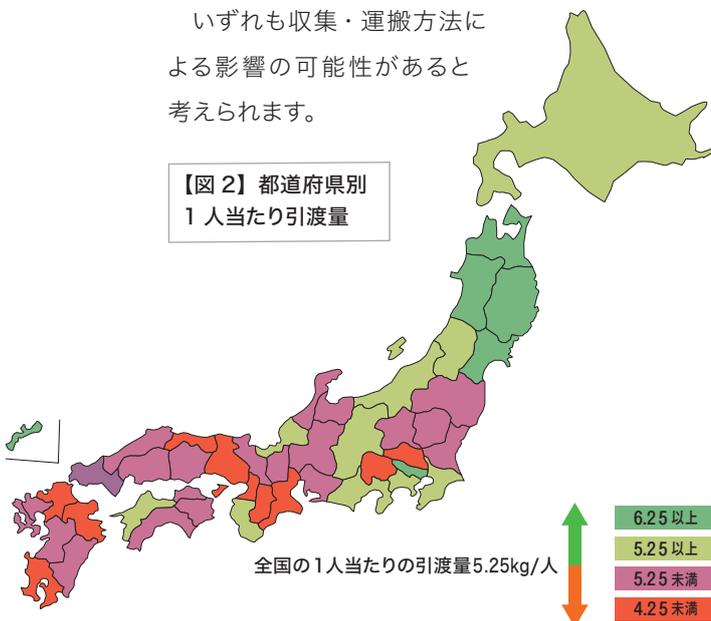
【図1】人口規模別1人当たり平均の引渡量



都道府県別の1人当たりの引渡量の分布(図2)では、北関東や沖縄県などを除くと概ね東高西低の傾向を示しており、従来と変わりありません。

いずれも収集・運搬方法による影響の可能性があると考えられます。

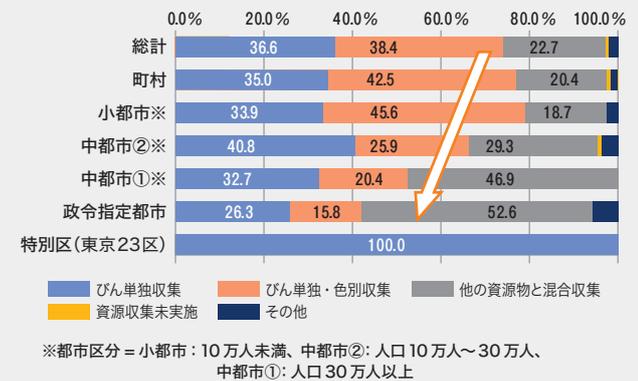
【図2】都道府県別1人当たり引渡量



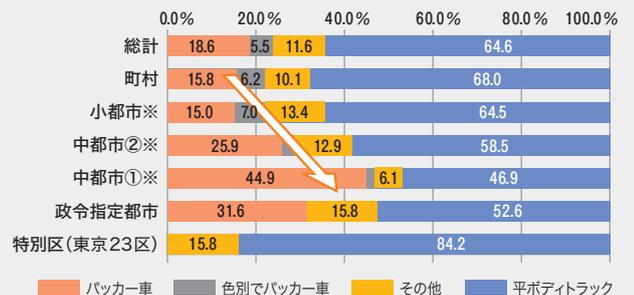
## 自治体規模別の収集・運搬方法の1人当たりの引渡量への影響

空きびんの収集方法は東京23区を除くと人口規模が大きくなるほど「びん単独」+「びん単独・色別」収集が少なくなり(図3)、運搬方法は人口規模が大きいほど「パッカー車」の比率が高くなる傾向があります(図4)。これらは、人口規模別1人当たりの引渡量(図1)と相関が見られます。

【図3】自治体規模別空きびんの収集方法



【図4】自治体規模別の運搬方法

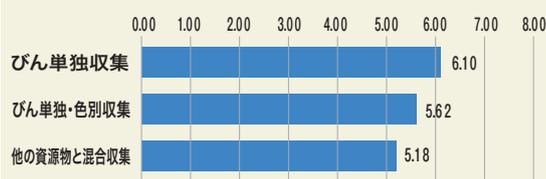


収集方法別の1人当たりの引渡量(平均値)は「びん単独」収集が6.10kg/人と最も多く、次いで「びん単独・色別」収集が5.62kg/人、「他の資源物と混合」収集は5.18kg/人と「びん単独」収集と1kg/人近い差があります(図5)。

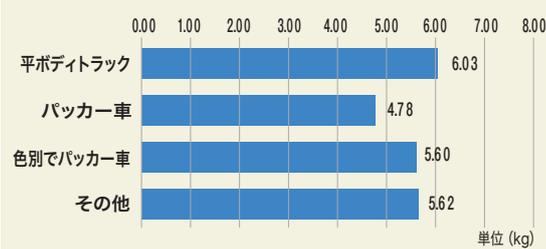
また、運搬方法別の1人当たりの引渡量(平均値)は「平ボディトラック」が6.03kg/人と最も多く、「パッカー車」は4.78kg/人と最も少なく、「平ボディトラック」よりも1.25kg/人も少なくなっています(図6)。これらのことから、東京23区は「びん単独」収集の



【図5】空きびんの収集方法別1人当たり引渡量の平均



【図6】収集時の運搬方法別1人当たり引渡量の平均

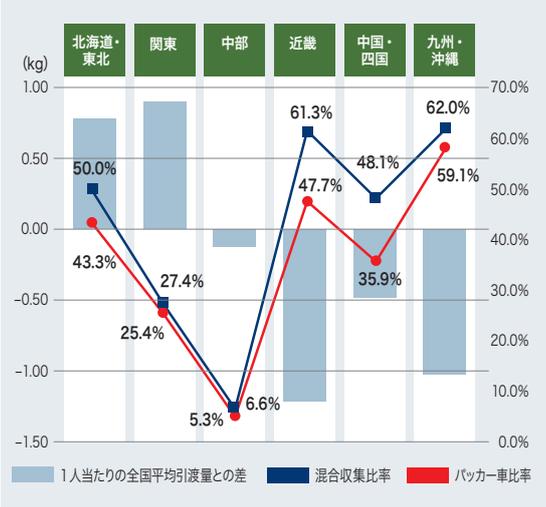


比率が100%であり、「パッカー車」の比率が0%であるため、1人当たりの引渡量が最も多いことが納得できますし、東京23区を例外として規模の大きい自治体ほど1人当たりの引渡量が少くなることの説明がつかず。このように、収集・運搬方法と1人当たりの引渡量には相関関係があり、大きな影響を及ぼしていることがわかります。

### 収集・運搬方法は地域別の1人当たりの引渡にも影響

地域ごとの収集・運搬方法と1人当たりの引渡を見ると「他の資源物と混合」と「パッカー車」の比率が高い地域ほど、1人当たりの引渡量が少なく、全国

【図7】地域ごとの収集・運搬方法と1人当たりの引渡



平均を大きく下回る結果になっています(図7)。このことから収集・運搬方法は1人当たりの引渡に影響を与えることがわかります。

このように、収集方法を「びん単独」収集に、運搬方法を「平ボディトラック」に変更することで、ガラスびんの引渡が増やせ、それによって資源循環により寄与できる可能性を高めることができます。

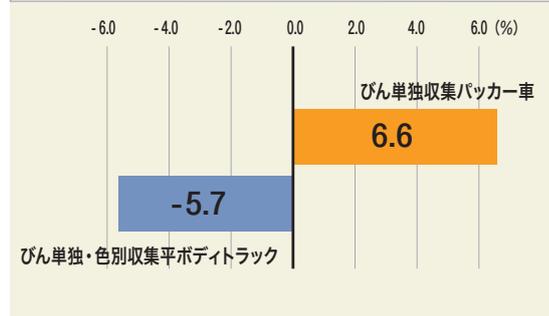
### 収集・運搬方法は「その他の色」の構成比にも影響

引渡合計に占める「その他の色」の構成比は増加し続け、令和2年度では29.7%となりました(1面グラフ参照)。「その他の色」引渡の構成比が出荷量の構成比の倍以上になっています。

そこで、収集・運搬方法と引渡合計に占める「その他の色」の構成比との関係について、収集方法と運搬方法の2重クロス分析を行いました。「びん単独・色別収集」と「平ボディトラック」の組み合わせでは、平均よりも6ポイント弱「その他の色」の構成比が低下し、「びん単独収集」、「パッカー車」では6ポイント増加しました(図8)。

このことから、収集・運搬方法と「その他の色」の構成比とは関係性があり、収集・運搬時の「混ざる」という要素を排除することで「その他の色」の構成比を低減させることができる可能性が高いといえます。

【図8】収集・運搬方法によるその他色比率平均とアンケート回答平均との差(2重クロス分析)



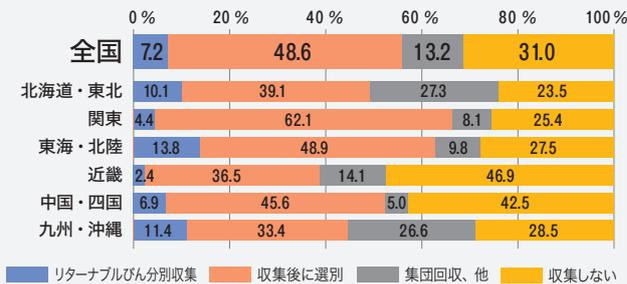
## 2021年度全国自治体調査 集計結果について

今年度も全国の1,741市区町村に対してガラスびんの収集方法等についてのアンケートを実施し、1,179市区町村から回答を得、回答率は自治体数ベースで67.7%、人口ベースで82.4%となりました。今年度は、定例の5つの設問（収集頻度、収集方法、収集道具・容器、収集形態、運搬方法）に、「化粧品びんの収集」と「生きびんの収集」の設問を加えました。なお、「生きびんの収集」は初めての設問となります。全国では人口ベースで7割近くの自治体が何らかの方法で生きびんを収集・選別しています。



詳しくはWebサイトをご覧ください

### 生きびんの収集（人口ベース）



## 「再使用に配慮した 1.8L壺利用自主ガイドライン」策定

回収された1.8L壺の内、リユースに適さない品質の回収びんはカレット化され、リサイクルされています。共用のリターナブルびんである1.8L壺をより多くリユースするためには、回収びんの品質を改善する必要があります。この度、1.8L壺再利用者協議会は、1.8L壺のリユースを促進するために、「再使用に配慮した1.8L壺利用自主ガイドライン」を策定しました。このガイドラインでは、「びんの色」「出荷荷姿」「ラベル（素材・加工、塗付糊）」について定め、加盟団体を通じて1.8L壺利用事業者に遵守を要請しています。



詳しくはリターナブルびんポータルサイトをご覧ください

## キッズ向けWebコンテンツ「ようこそ!びんの森」を 「びん助の3R探検」にリニューアルしました

当協議会のWebサイトの人気コンテンツを「びん助の3R探検」としてリニューアルしました。“ガラスびんの3Rを楽しく学ぶ”をコンセプトにわかりやすく見やすく構成しています。中でも、びんの3R検定はぜひチャレンジして、ガラスびん3R博士の認定書をゲットしてください。これから新企画など加わる予定ですのでご期待ください!



2022年6月13日

### 第26回通常総会開催。全議案が承認されました

2022年6月13日、日本ガラス工業センター会議室において、第26回通常総会が実地とオンラインのハイブリッドで開催され、2021年度事業報告(案)・収支報告(案)、2022年度事業計画(案)・収支予算(案)などの議案が審議され、全議案とも可決、承認されました。

2022年7月6日

### 事業計画記者説明会を3年ぶりに開催

新型コロナウイルス感染症拡大のため3年ぶりとなる「2022年度事業計画記者説明会」を日本ガラスびん協会との共催で2022年7月6日に開催しました。

当日は11社、12名の記者にお集まりいただき、当協議会からは2022年度事業計画、2021年ガラスびん軽量化実績、令和2年度市町村別分別基準適合物引渡量の分析結果などを説明しました。説明会に引き続き、「SDGs社会で考えるガラスびんの未来」と題して、京都大学大学院の浅利准教授に講演していただきました。

